

甘粕憲兵大尉と三重県

垣野 啓一 陸士 61

戦後、旧制津中（もと三重一中）から陸士へ進学という同じ経歴の先輩の有志が集まって「津中士官会」を立ち上げ、親睦を深めました。士官の名を避けての名乗りです。

その席上、甘粕正彦憲兵大尉は、生まれは仙台市だが津中出身だという声が出ました。早速図書館で詳細に調べたところ、彼は明治38年（1905）津中2年から名幼に進み同45年陸士24期生（歩兵）として卒業していました。加えて縁が深いことに今の津市久居町駐屯の歩兵第51聯隊に赴任し少尉に任官したのです。

士官会の誰もが「なんだ甘粕大尉は我々の大先輩ではないか」と吃驚した次第です。

この陸士24期には、河辺虎四郎（終戦時の参謀本部次長で交渉のため真っ先にマニラのマッカーサー司令部に派遣された）、鈴木宗作（第35軍司令官でレイテ島で玉碎、久居の聯隊も隷下で全滅）のほか、池田廉

二、土橋勇逸、秦彦三郎の名が見えます。また、軍人を途中で辞めた作家に転向した岸田国士も同期生です。1年下の25期生には、対米戦の強硬論者で大東亜戦争を主導した富永恭次、武藤章、田中新一がいます。

* * *

正彦の父甘粕春吉は宮城県出身の警察官あがり、宮城県警、警視庁、台湾総督府、福島県警、高知県警と勤め、明治33年三重県警に転じ宇治山田署長に任じられました。その後警察畑を離れ、鈴鹿郡長、飯南郡長（現在の松阪市を中心とする地域）に就任します。春吉は郡長として本居宣長鈴鹿記念館の創設に尽力しました。そして明治43年秋大正天皇当時は皇太子）視察時に先導役を勤めたと記録されています。

6男3女の子沢山の一番上が正彦で、彼は父の転勤に伴い小学校を五つ転校しました。そして松阪の小学校から津中に進学します。男子6人は上から正彦、二郎、三郎、四郎、五郎、成雄と命名され、津中同窓会名簿で探しますと、二郎（三菱信託銀行社長）、四郎（満鉄調査部上海事務所長）、五郎（満洲電化社員）の三人も津中卒業でした。

陸軍歩兵少尉となった甘粕は特に初年兵教育に熱心で独特のキャラクタで兵隊に慕われます。こんな逸話が残っています。

久居市新地町には遊郭がありました。某日道ゆく甘粕と2階の窓から顔を出した部下と目が合いました。甘粕は直ちに2階に上がりましたが部下を叱るところか、酒肴を注文し登楼中の兵隊と一緒に大騒ぎで遊びました。この話が聯隊中に広がって甘粕の人気は益々上昇しました。

大正4年（1915）戸山学校在校中、落馬で膝関節に大怪我をし、日本各地の温泉で約1年半療養する羽目となり、一時は退官も決意しました。しかし、これを熱心に止めたのが陸士時代の教官東條英機（陸士17期）で、憲兵科に転ずることで軍籍に残させました。大正7年憲兵大尉として朝鮮の憲兵分隊長となり、以降、彼の抜群の能力が買われ、千葉県の市川憲兵分隊長を経て11年渋谷憲兵分隊長、12年9月には最右翼の麹町憲兵分隊長を兼務させられました。即ち最優秀の憲兵将校だったのです。

明治末から大正時代にかけての著名な社会主義者としては、大杉栄、荒畑寒村、山川均などが挙げられます。また女性では伊藤野枝、神近市子（戦後、社会党代議士となり売春防止法の成立に貢献する）などです。最も大物は大杉栄ですが、奇しくも彼は明治32年に名幼に入っていて甘粕の6年先輩に当たります。在校中に不良放校され「幼年学校から革命児へ」とマスコミに騒がれた男でした。

誰でも承知のように大正12年9月1日に関東大震災が起ります。政府はこの大災害に対処するため戒厳令を施行します。その最中に大杉栄、伊藤野枝（当時大杉と内縁同棲中）が憲兵に拘束されます。このとき二人と一緒にいた大杉の甥橋宗一（6歳）も同行されました。そして憲兵隊庁舎の中で3人共殺害されたのです。当時、日本全国で最大の関心事であり、社会問題となった超大不祥事件でした。

その犯人として逮捕され軍法会議にかけられたのは次の5名です。

甘粕正彦憲兵大尉
森慶治郎憲兵曹長

憲兵伍長1名

補助憲兵上等兵2名

結果は、甘粕懲役10年、森同3年、あとの3名は無罪でした。甘粕33歳です。

軍法会議では「上官の命令で殺害したのではないか」と厳しく何度も審問を受けますが、有罪の二人は最初から最後まで「天皇制国家に対し有害な社会主義者を自分の意志で抹殺した」と主張し刑罰を甘んじて被ります。

これは戦後の研究者の見方ですが、当時の宇垣一成陸相が大杉の検束を内々に命じたという説が最有力になっていきます。甘粕はこの内情を一言も洩らさず、罪科を一身に背負ったことになりました。同じ名幼の後輩として大杉を抹消したかった思惑もあるでしょう。

甘粕の性情から言って、この見方が当たっているように私には思えてなりません。甘粕は刑務所に入りますが、大正15年末昭和天皇即位の恩赦で仮出獄します。2年10月の短さです。やはり裏面に作偽の思惑が働いたとしか思えません。正に大杉栄殺害事件は政治劇でした。

なお、大杉栄は伊藤野枝と同棲する前には神近市子とも同棲していた、後に神近は刃物をもって二人を脅迫したとも言われています。

* * *

軍人を離れたとは言え、甘粕のよくな逸材を日本陸軍は放っておきません。後ろめたさもあるので一層彼の転身に配慮したのでしょう。昭和4年7月甘粕は満洲に現れます。

そして、関東軍の下働きをする民間別動隊長として満洲建国の謀略工作に深くかかわっていきます。天津を脱出したラストエンペラー溥儀を迎え保護したのも甘粕です。

満洲国独立後は、民政部警務司長（現在の日本で言えば警察庁長官）、宮内府諮議（宮内庁顧問）を勤め、昭和12年には民間に転出して協和会（当時の日本で言えば大政翼賛会）の総務部長をやり、14年最後のポスト満洲映画協会理事長に就任します。ここで映画監督の内田吐夢や女優李香蘭（のちの山口淑子）などを育てます。

中国本土から満洲へ働きに来る労働者（当時は苦力と呼ぶ）の受人機関である大東公司を牛耳り、入国料として膨大な金額を溜め、また満洲

の麻薬王里美甫とも深いかわりを持つて巨額の裏金が使えました。

また昔の軍歴から関東軍首脳にも直言でき、日本政府から満洲国に派遣された高級官僚の岸信介、星野直樹、古海忠之、大橋忠一、十河信二と太いパイプを持つ甘粕は、本場に満洲の実力者となりました。それに師弟関係にある帝都東京の東條英機首相・陸相とはツーカーの仲でした。「満洲の昼の支配者は関東軍、夜の王者は甘粕正彦」と喧伝された所以です。

南満洲に配備されていた関東軍を北滿にまで進出させ満洲全土を占領する口実づくりには在ハルビン日本総領事館に爆弾を投げ入れ中国人がやったように見せかけた謀略工作の実行犯も実は甘粕でした。

今では「短期間の人造国家・満洲国」と歴史学では言われていますが、深く甘粕が関与していたことは事実です。

大東亜戦争の末期、昭和20年8月9日、日ソ中立条約を破ってソ連軍が満洲にだれだれ込みます。そして15日の終戦、20日甘粕は満映理事長室で青酸カリをおおって自殺しました。54歳の謎の多い一生でした。

* * *

大杉栄事件のもう一人の実行犯森慶治郎憲兵曹長も、奇しくも三重県人です。津市（当時は河芸郡大里村）出身の森、津中出身の甘粕、なんと三重県はこの事件と接点の多いこと。津中士官会のメンバー皆が吃驚しました。

森は甘粕より早く大正14年2月の恩赦で仮出獄し、直ちに故郷大里村役場に勤め、その人材を見込まれて収入役、村長（昭和15年3月〜21年9月）までやっております。懲役3年の実刑を宣告された元軍人がこのように活用された事実から、大杉栄事件が犯人二人だけで計画実行されたものでないことが明白です。

戦前の政治裏面史の一こまでしょう。それにしても、天下を震撼させた大事件と三重県のきずなの深いことを改めて噛みしめました。

（甘粕正彦 昭和17年頃）

